【資料６】

令和４年度　第１回義務教育問題研究協議会における協議の概要

開催日時　令和４年５月１９日（木）　午後２時から午後３時４０分
場　　所　愛知県庁西庁舎　教育委員会室

《次　第》
１　開会
２　教育委員会挨拶（学習教育部長）
３　委員等紹介
４　会長・副会長選出
５　会長・副会長挨拶
６　議事
（１）報告事項
①　愛知県義務教育問題研究協議会の歩みについて
②　令和４年度愛知県義務教育問題研究協議会協議題について
「ＩＣＴ機器を活用した教育活動の在り方
～ＩＣＴ機器を全ての子供に寄り添うためのツールに～」
（２）協議事項
①　協議内容について
○　ＩＣＴ機器を全ての子供に寄り添うツールとして活用できる場面には、どのようなものがあるか。
○　ＩＣＴ機器を活用するうえで、注意すべきことや大切にしなければならないことは何か。
②　専門部会の設置について
③　令和４年度愛知県義務教育問題研究協議会の事業計画（案）について
７　連絡事項
８　閉会の挨拶
９　閉会

＜協議の記録＞（・意見）

ＩＣＴ機器を全ての子供に寄り添うツールとして活用できる場面について

＜外国にルーツのある子供への指導＞
・　特に来日して間もない子供には、ＩＣＴの活用が定着・習得に有効である。
・　初期指導教室が遠くにある場合は、一人一台端末を活用し、学校からリモートで参加している。
・　自動翻訳機の使用一つだけでも、できることはかなりある。

＜ＩＣＴのもつ力＞
・　「検索・調べる」：絶えず疑問をもつ、調べるという習慣をつけることができる

- 「つなぐ」：中学生がオンラインで高校生活について学ぶ、海外とつながるなど、発展性がある。
- 「記録」：学びの足跡を蓄積し、ポートフォリオ的に活用することで、成長を見られる。記録は、家庭と学校をもつなぐ。連絡帳での保護者との交流や学年便り等も、置き換えられる可能性がある。
- 今後は、家に持ち帰って子供が協働的に学びを「深める」ということをやっていく必要がある。
- 小中学生にＧＩＧＡスクールに関するアンケートを行った際に、あっという間に１万人を超える調査結果が集まったという。このようなことは一人一台端末だからできることだ。
- コロナの時にオンライン授業の取組を続けたら、不登校の子供が興味を示し、登校するきっかけになったという話もある。
- 社会に繋がるということは、これからの時代において大切なことだ。ＩＣＴは「蜘蛛の糸」のような存在であって欲しい。

＜心の記録、生活の記録＞

- スクールライフノートというアプリの評価が高い。これは、子供が朝登校したときに、自分の心の状態を、晴れ・雨・曇り・雷などのマークで記録するアプリである。担任は、子供の変化を見ながら、重点的に声をかける。子供も自分の気持ちを振り返ることができる。
- 健康観察のアプリなどは、教員の働き方改革にもつながる。
- 毎朝、今日の頑張りたいことをアプリに記入し、帰りの会で反省や振り返りをしている。

＜ＩＣＴを使った評価＞

- 技能教科においては、個別の評価を画像や動画の記録で行うと、授業時間の確保にもつながる。
- テストや評価をする場所として授業を使わなくて済むことで、授業の中身・在り方そのものも変わっていく可能性もある。
- 英語では「このタブレットが認識するように発音しよう」と呼びかけていた。ここには、教師が「評価する側」から、「応援する側・寄り添う側」に立てるという良さがある。

＜企業と学校・開かれた学校＞

- 企業では、「ブラザー・シスター制度」といって、少し年上の先輩が、新入社員の悩みを聞く取組がある。タブレットなどを使って円滑なコミュニケーションをとり、離職を防ごうとしている。
- 学生がリアルな場面でうまく言語化できないのは課題の一つである。スマホで録音・録画をしながら、自分の姿を見返し、スキルアップを促している。
- ＩＣＴを使えば、外の人間が直接教室に入っていかなくても、現場と中継してリアルなキャリア教育ができるのではないか。

＜家庭教育支援＞

- 孤立している家庭には、学校からの一人一台端末が良い接点にならないか。
- モラル教育において、保護者の分布というのは菱形になっている。上の方にいる非常に熱心な人たちは発信力もあるので、まずはその層の啓発に取り組んでいる。

ＩＣＴ機器を活用するうえで、注意すべきことや大切にしなければならないことは何か

＜心の記録、生活の記録＞

- 心の天気については、そこに表現されたものが全てではない。自分の心や思いを発信できない子もいる。
- これからは、ＩＣＴを活用して子供を理解する間口を広げ、気になる子供にリアルの世界で注目していくなど、いろいろなやり方で子供を理解していく必要がある。
- 本当は、絵文字やマークではなく、自分の気持ちは自分の言葉で表現できる子供になって欲しい。

＜健康面・モラル指導＞

- ＩＣＴは便利な反面、健康面の不安、視力の低下など、リスクも大きい。
- スマートフォンも含め、デジタル機器への依存症の問題もある。
- 端末が入ってきたとき、家への持ち帰りを始めると、やはり苦情も聞かれた。モラル指導と使用制限のバランス、道徳教育との絡みも含め本当に難しい。
- 自治体や県がキャンペーンを張るなどして、家庭の教育力を上げていかなくてはならない。ＩＣＴのマイナス面にばかり目を向けず、社会・家庭で一緒に前向きに進めていかなくてはいけない。
- ＳＮＳは怖い部分もあるが、全てを学校が把握し、管理することは現実的ではない。危ないから使わないというわけにはいかない。
- 情報モラルについては、学校の端末が入ったから起こっている問題と、これまでも個人で起こっていた問題が混在している。見えなかったものが、見えるようになったということではないか。

＜リアルな体験とのバランス＞

- 愛知県の子供の体力が落ちていることが気にかかる。自分で目標を設定して、自分で記録をしながら体力を高める取組などができないか。
- 授業の基本は、やはり対面式だ。安易にタブレットに流れていく危険性を理解しながら、教育はあくまで人と人とのふれ合いの中で進めていくべきである。
- タブレット導入当初は、子供はタブレットに夢中だったが、慣れてきたことや、休校により人との関わりが見直されたこともあり、今では友達と過ごす時間を大切にしようとする様子が見られる。

＜機器・ハードウェアの問題＞

- 文房具ということなので、校外学習などにも積極的に持ち出したいが、壊れたらどうするか。宿泊行事では、充電器やWi-Fiなどのインフラの問題もある。
- 全てが電気で動いていることを考えると、災害の時にどうするのだろうという思いもある。
- 今回は、公費でタブレット端末が入っているが、５年後などの買い換えの時にどうするのだという問題がある。
- 契約によって入れられるアプリと入れられないアプリがあることにも大変不便を感じている。
- 学校によって、動画アプリなどを許可するか対応が異なる。